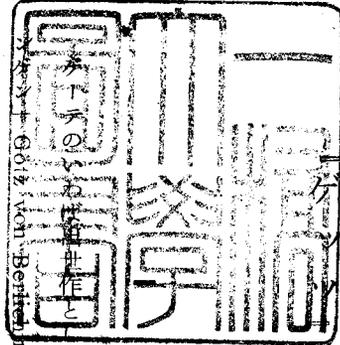


## の問題

關 泰 祐



て、彼の作品中でも最も著名なもの一つに属する「鐵手のゲッツ・フォン・ベルリヒ  
の死」(Der Tod des Helden Götts von Berlichingen mit eiserner Hand. Ein Schauspiel (一七七三))は、その最初の形態として、わ  
ゆる「初稿ゲッツ」、すなわち「鐵手のゴットフリート・フォン・ヘルリヒンゲンの物語、戯曲化」Geschichte Gott-  
friedens von Berlichingen mit der eisernen Hand, dramatisiert (一七七一、但し公けに發表されたのはゲーテの死  
の翌年すなわち一八三三年である)を持つている。すでにこの兩者の標題にも明らかのように、「ゴットフリート」はゲ  
ッツ(ゲッツとはゴットフリートの愛稱)の自傳の「劇化」であるのに對し、「ゲッツ」は、これにのち改訂の筆が加え  
られて、はじめて「戯曲」となつて公刊されたものである。したがつていま「ゲッツ」を問題とするにあたつても、  
まずこの「ゴットフリートの物語」から入つてゆかなければならない。

二

『ゲッツ』の問題

ゲーテが十六世紀のドイツの騎士ゲッツに興味を抱きはじめてのは、シュトラースブルク遊學時代（一七七〇—七二）のことであつた。あまり身を入れて勉強しなかつたとはいへ、法律專攻の學生であつた彼が、十六世紀の法律史の研究をしているうちに、この人物に惹かれはじめたのである。ゲーテ自身「詩と眞實」に次のように書いている。「ことが私がヘルデルに對してひたかくしにかくしていたのは、すでに私の心に根をおろしていて次第に詩的形態をとろうとしていた或る題材に對する關心であつた。それは『ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン』と『ファウスト』であつた。かねて私はゲッツの傳記に深く心を動かされていた。殺伐な亂世における素朴で善良な自力獨行のこの人物は、私の深い共感をよびおこした」（第三部）。この計劃は間もなく實行に移され、一七七一年の年末ちかくに「ゴットフリート」は一氣に六週間で書きあげられたのであるが、そこまでに至るゲーテの氣持は決して平坦なものではなかつた。シュトラースブルクからフランクフルトに歸つてきてすぐに彼の就いた職業は辯護士であつたが、彼が大學で專攻した法律は彼自身の希望に反して父親の強制したものであつたし、反撥を禁じ得ない頑固な父の干渉下での辯護士生活は、彼にとつて一向に興味のもてないものであつた。後年ワイマルの宮廷に入つてから、彼はヨバンナ・ファールメルに宛てて、「僕もまたおそらくここにとどまつて、できるかぎり、また運命の好むだけのあいだ、僕の役割を演ずるでしょう。それがたとえ今後一三年のことであろうと、家での無爲な生活よりはましです。家では、この上ない意欲をもちながらなにもできないのです。」と書いているし、その當時ザルツマンに宛てた手紙には、「フランクフルトは相變らず、みじめな居住<sup>ホス</sup>地です。もつとも、お望みならラテン語でニードゥスと申してもよろしい。鳥を孵化するにはなるほど持つてこいですが、それ以外には、たとえていうなら、暗い洞穴、不快きわまる穴なのです。神よ、

この悲惨より救いたまえ。アーメン。」(一七七一、一一、二八)と述べている。巨人的な意欲を持ち、内なるデーモン  
のうながしに驅られるゲーテに對して、狹隘な故郷フランクフルトの町は、何も與えてくれようとしなかつた。閉ざ  
された小さな世界、抑壓された市民生活、偏狹な市民精神、到るところに見いだされる腐敗と墮落、要するに、三十  
年戦争と七年戦争による荒廢を経ていよいよ露呈されてきたドイツの一般的無力さ、依然として強固な封建的桎梏  
と、無自覺、未發達の市民社會の現實とは、二十二歳の青年ゲーテを苦しめずにはおかなかつた。しかもその上、何  
の罪もないのに無慈悲にもゼーゼンハイムに棄て去つた可憐な少女フリーケのまぼろしが心をさいなむのであつ  
た。彼は、大していそがしくもない辯護士の仕事は父親にまかせきりというようなかたちで、自分は不安と衝動とを  
胸に抱きながら近郊の山野をさまよつた。こういう状態にあるとき、ゲーテとしては救いを詩作に求めるのほかなか  
つた。そして浮びあがつてきたのが、かねてから心を惹かれていた「ゲッツ」のプランだつたのである。それはまさ  
に一つの情熱でさえあつた。ゲーテはザルツマンに宛てた前掲の手紙のなかに書いている。「貴兄は僕を非常によく  
識つていられるが、それでもなぜ僕が手紙を書かないかという理由を推量はされまいということは、賭けてもよろし  
い。それは一種の情熱、全く思いもかけぬ情熱です。この種の情熱がいかに僕を一つの圈内に投げこむか、おわかり  
でしょう。そのため太陽も、月も、愛する星辰までも忘れてしまうのです。これがなくては存在できません。それは  
づとに御承知のはずです。どんな犠牲をはらつても、僕はそれに打ちこんでゆきます。今回は結果をおそれる必要な  
ど毛頭ありません。僕の全ゲーニウスは擧げて或る企て(筆者註、「ゴットフリート」を指す)に執心して、そのためホ  
メル、シェイクスピアなど一切が忘れ去られたのです。僕は最も高貴なドイツ人中の一人の歴史を戯曲にし、立派

な男の記憶が失われぬようにするのですが、僕のはらう多くの努力も僕には眞實の娛樂です。當地ではそれがきわめて必要です。というのは、僕たちの全活動が、それ自體でうやむやにおわらねばならぬような場所に生活するのは悲しいことですから。僕は貴兄のかわりになるような者も求めず、ひとり野や紙上を歩きまわっています。ひとり内省してみると、僕のたましいは、シュートラスブルク時代には萎えていた高揚をいまにして感じるので。これは眞實です。もし僕が、自分の中に感ずるあらゆる強さを一つの對象に投げつけ、自分の力でできるだけそれをつかみ運ぶようにつとめなければ、この僕の相手もほんの哀れなものにおわるでしょう。うまく運ばぬものは曳きずつてもゆきます。できあがつたらさしあげますが、少なからず貴兄を満足させるものと思つています。それは一個の高貴な祖先（残念ながらわずかに墓碑銘から議つてゐるのにすぎぬですが）を生かして描寫するのですから。」さらにゲーテは、後年この折のことをまた別の側面から述べている。「私はシェイクスピアの作品に絶えず關心をもちつづけたために、私の精神は大いに廣くなつていた。それで、狭い舞臺面と上演のために割當てられた短い時間とは、なにかどつしりしたものを演出するにはどうしても不十分に思われた。實直なゲッツ・フォン・ベルリヒンゲンがみずから書きしるしたその生涯は、私を驅つて否應なしに歴史的な取扱いかたをとらしめた。そうして、私の想像力は次第につばさを伸ばして、ついには私の戯曲の形式も劇場のあらゆる限界をふみこえ、生きた現實の出來ごとになります近すころとするに至つた。私は仕事を進めるとともに、このことについて妹とくわしく語りあつたが、彼女はそうしたものに心から興味をよせた。そして私がいっこう仕事にとりかかろうともせずに、この話をしばしば繰り返したので、とうとう妹は我慢ができなくなり、ただいたずらに空論をたのしんでばかりいないで、そんなにありありと胸にうかんで

くるものを、いよいよ今度こそは紙の上に書きとめてくれと深切ごころからしきりと私にせがむのであつた。これにうながされて、或る朝私は、腹案と構想をあらかじめ立てることもしないで書きはじめた。私は最初の數場面を書いて晩にそれを妹コルネリアに読んで聞かせた。妹はそれに大喝采をおくつてくれたが、ただしそれは條件つきであつた。というのは、妹は私ができるようにつづけてゆくかどうかを疑つていたからである。いやそれどころか、彼女は私の根氣に對して決定的な不信をさえ表明したのであつた。それがますます私を刺戟した。私はその次の日も、またその次の日も書きつづけた。毎日報告するたびに希望は高まつていつた。もともと素材はまつたく自分のものになりきつていたのでから、一步一步と進むにつれて私にもすべてがいつそう生き生きとしてきた。こうして私は間斷なく作にしがみつiki、右顧左眄することなくまつしぐらに仕事をつづけた。そして約六週間にして、私は假綴にされた原稿を眺めるたのしみを味わつた。(詩と眞實、第三部)

### 三

かくもはげしい情熱をかたむけて一氣に成つた「ゴットフリート・フォン・ベルリヒンゲンの物語」とは、それでは一體いかなる作品であつたろうか。その内容は「ゲッツ」と異つてあまり一般的に知られていないから、ここでわれわれはややくわしくそれに立ち入つてみなければならぬ。

構成からいうと全部で五幕、通算して場(別にはつきり「場」として表わしてゐるわけではないが、便宜上、場面の轉換が行われたときこれを「場」として扱うこととする)の數は實に五十九になる。くわしくいうと、第一幕が五

場、第二幕が九場、第三幕が二十三場、第四幕が二十三場、第五幕が十六場となつてゐる。

バンベルクの僧正と葛藤を起していたゴットフリートは、一旦和解が成立つたのにもかかわらず相手が味方の小姓を捕えて返さないのに業を煮やし、報復として、敵の將アーデルベルト・フォン・ワイスリングを捕えてしまふ。

かつてはゴットフリートと幼馴染のあいだがらにあつたワイスリングは、ゴットフリートの昔を忘れぬ厚い情にほだされて僧正方とは手を切るといふ約束をした上、ゴットフリートの妹マリアの清純な美しさに惹かれて結婚を申しこむ。好男子のワイスリングを憎からず思つていたマリアに異存のあろうようはなく、ゴットフリートも、これはいよいよワイスリングもこつちのものだと考へて至極満足である。こうして一切が幸福な結末を豫示するものように思われた。ところが、有力な味方であるワイスリングを失つて困却した僧正の方では、何とかして彼を取戻さうと思ひ、折から身を寄せていた美貌のきこえ高い妖艶な未亡人アーデルハイト・フォン・ワルドルフをえさにしてワイスリングを釣りよせようといふ計劃する。その使いをうけたワイスリングは、あと始末のこともあつて一旦バンベルクへ戻つてゆく。用事もすんだのでいよいよ歸ろうとしたが、アーデルハイトの巧みな手管にひつかかつてその魅力から離れることができなくなり、とうとうまたゴットフリートとの約束を破つてずるとバンベルクにとどまつてしまふ。彼はもともと氣が弱くて優柔不斷ではあるが、決して悪人ではないから、ゴットフリートとの誓約とマリアとの婚約が氣にかかる。しかし彼は宮廷的な優雅な人物で、所詮ゴットフリートの世界の間人ではないため、アーデルハイトの魅力に吸い寄せられて手もなく丸めこまれてしまふのである。一方アーデルハイトは、僧正の希望もあり、また立派な男と聞くワイスリングを征服しようとの氣持もあつて、彼に興味を抱いたのである。しかもワイ

スリンゲンはそうなるとアーデルハイトに吹きこまれたせいもあつて、誓約を破つたのが氣になるだけにますますゴットフリートを仇敵視しようと思ひこむ。彼こそは悪辣無頼の騎士で、自分は言葉巧みにだまされたのだというふう  
に自身を納得させようとするのである。こうして、ゴットフリートを滅ぼすことは何等咎むべきことではないという理由を強いてつくりあげると、今度はその通り實行すれば自分の誓いも消滅だと考ふるようになる。アーデルハイトにそそのかされてワイスリンゲンの抱くこうした考えは、ゴットフリートにおそわれた商人たちが皇帝に直き直き訴える場で、はつきりとうかがうことができる。騎士たちに好意こそ持つておれ、討伐しようなどは考えていない皇帝を言葉巧みに説きつけて、帝國軍を繰り出させることに成功するのである。皇帝はゴットフリートがもう少しおとなしくすることを望んで承知するのであるが、ワイスリンゲンは徹底的に彼らをやつつけるつもりである。こうして帝國軍がゴットフリートにさしむけられることになる。ワイスリンゲンはさすがにその軍には加わらず、別隊を率いてアーデルハイトのために戦いに出かける。ゴットフリートは寡勢を以て帝國軍を散々に駈け惱ますが、ついに衆寡敵せず居城は包圍される。そこで僚友フランツ・フォン・ジッキンゲンは、マリアと婚約してから後日を期して共に城を逃れる。そのあとでゴットフリートは、城は明け渡すが人員は自由に退去してよいという條件で和睦する。ところが信義をふみにじつた相手のために、いきなりおそわれて捕えられ、ハイルブロンに護送される。そして、この議事堂内で顧問官がゴットフリートに起請文に署名させようとしたとき、自分がいつの間にか謀叛人にされているのを知つた彼は、憤然としてそれを拒む。それで、呼び出された武装市民とゴットフリートとが危険な對峙をつづけているところへ、折よくジッキンゲンが手兵を率いて町を圍み、ゴットフリートは救い出される。以後ゴットフリ

トは居城に歸つて蟄居することになる。彼はヤクストハウゼンで鬱勃たる氣持を抑えながら自傳を書いて心を慰めてゐる。こんな結果になつておさまらないのは、アーデルハイトとワイスリンゲンの夫婦である。ひとえに皇帝の弱氣のせいだと憤慨してみても今更どうにもならない。しかしそのうち彼らのまぢ望んでいたような事態が起つてきた。諸侯の壓制に反抗して各地に大規模な百姓一揆が勃發し、ゴットフリートが蟄居を破つてこれに關與したのである。

ここまでが第四幕で以下第五幕に入るが、ここから事件は思いがけない發展をとりはじめ。仲間の騎士たちとはぐれたアーデルハイトは、ただ一人ジブシーのむれに姿を現わす。彼女はジブシーの女から豫言を聞き無氣味な思いをしてゐるうちに、ジブシーの息子が彼女に抱きついて接吻しようとする。ちようどそこへジッキンゲン、フランツらが登場して危うく彼女を連れ去る。ワイスリンゲンの家來であるフランツはかねてからアーデルハイトに熱烈な思いをよせていて、ここでジッキンゲンとの間にさや當てを起す。ジッキンゲンはゴットフリートの盟友であり、義弟にも當るわけであるが、いつの間にかここにアーデルハイトの戀人としてあらわれるのである。アーデルハイトはフランツには大して關心をもつておらず、男らしいジッキンゲンにひきつけられる。こうして新しい戀人ができてみると、彼女には夫のワイスリンゲンが邪魔になつてくる。男らしい男と思つて誘惑したのに、優柔不斷な氣の弱い男であることが分つてきたからでもある。ジブシー女の豫言も思い出される。それによれば彼女は三人の戀人をもつてゐるが、三番目の男こそ最も立派な男である、そしてその戀には邪魔者が入るからそれは片づけてしまふがよい、というのである。彼女にはその三人目の男がジッキンゲン、邪魔者がワイスリンゲンであると思え、ワイスリンゲンを亡きものにしようと考ええる。

一方百姓一揆は猖厥をきわめ、しかも殘虐性を加えてくる。夫を捕えられたヘルフェンシュタインの妻が息子をつれて歎願にくるが冷然と斥けられる。一揆は次第に指導者の必要を痛感するようになって、ゴットフリートをむりやりに頭目に祭りあげる。かくしてゴットフリートは誓約を破つて活動を開始することになるが、間もなく敗れて牢獄に囚えられる。彼の古い城も百姓どもに散々に破壊され廢墟となつて、ゴットフリートのなげきは深い。ワイスリゲンがゴットフリートを裁く最高委員の任にあるので、マリアは兄の命乞いに彼のところへ赴き、首尾よく死刑宣告書を破棄させる。ゴットフリートの死を願つていたワイスリゲンは、果して彼を死刑にしようとしていたのである。しかし體の衰弱でいよいよ氣弱くなつていた彼は、婚約したきり捨ててしまつたマリアに來られては、それを取消さずにはいられなかつた。彼の衰弱は、アーデルハイトに盛られた毒のせいであつた。この事實を彼はそのとき呼んだ女中の口から知る。そして妻の愛しているのはジッキンゲンであり、フランツも歡喜の一夜を彼女から與えられた代りにこれまた毒殺されかけていることが分る。

夫ワイスリゲンとその家來フランツの二人を毒殺したアーデルハイトは、祕密裁判所によつて死刑を宣告され、刑吏が彼女の部屋をおとずれる。ところがこの男までがアーデルハイトの色香に迷い、危うく使命を忘れて、彼女に謀られて逆に殺されそうになつたが、刺されながらも辛くも立ち直り、任務を果して立ち去る。

牢獄のゴットフリートは、勇敢な味方が或いは殺され或いは四散してしまつたのを聞きながら、部下のレルゼと妻のエリーザベトとに圍まれて、衰弱と絶望のうちに自由、自由と叫びながら死んでゆく。

## 四

わずか二十二歳の青年ゲーテが憑かれたように書きまくつたこの記念すべき最初の力作「鐵手のゴットフリート・フォン・ベルリヒンゲンの物語、戯曲化」は、しかし作者の生存中に陽の目をみる運命には置かれなかつた。ゲーテは書き上げると、これをザルツマン、メルク、ヘルデルに送つた。ザルツマンとメルクとはただちに好意ある言葉を寄せて作者を激励してきたが、ヘルデルからの返事はなかなか來なかつた。受取らないままに、ゲーテは一七七二年五月ウエツラルの帝國高等法院に實習におもむいた。ここではじめてヘルデルの批評に接するのであるが、それは決して香ばしいものではなかつたらしい。手紙そのものは失われて直接にその内容を知ることができないが、「詩と眞實」には次のように述べられている。「私はヘルデルに原稿をおくつてやつた。彼はこれ（筆者註、メルクの好意的な言葉）に反して不親切な冷酷な意見を示したばかりか、わざわざそのために二つ三つ即興の落首を作つて私を嘲笑的な名でもつて呼ぶことを忘れなかつた。」いかにも皮肉で嘲笑好きなヘルデルのやりそうなことと思えるが、これははるか後年になつて書かれた思い出の記であり、且つはゲーテがヘルデルと不和におちいつたのちのこと（ヘルデルは「詩と眞實」執筆のかなり以前に、和解せぬままに歿している）に屬するから、ヘルデルのことをやや悪く書きすぎているかも知れないという疑いが残る。というのは、ヘルデルが「ゴットフリート・フォン・ベルリヒンゲンの物語」を讀んだのちに、いいなづけのカロリーネ・フラックスラントに宛てた次のような手紙が残されているからである。ヘルデルは書いている。「これをお讀みになれば、あなたもこの世ならぬ喜悅の數時間を味われるでしょう。このなかに

は極めてドイツ的な強さと深味と眞實とがあります。もちろんところどころ思考の産物にすぎないところはありますが。」この手紙と前掲の「詩と眞實」とをくらべて見るならば、そのちがいは餘りにもはつきりしている。散々に嘲笑を浴びせるのを常としていたかつての弟子に、この手紙同様の讃辭を送つたとは必ずしも信じられないけれども、のちの「ゲッツ」を激賞しているヘルデルがそれほど手ひどい罵詈ばかり浴びせたとも、確かに斷じ難いものがある。當時のゲーテの書簡を探してみると、果してわれわれは次のような手紙にぶつかると、ゲーテは書いてゐる。「……『ベ  
ルリヒンゲン』について一言しましょう。貴翰は慰安狀でした。僕は大兄以上にあれをずつと貶しめていました。

『君にかかつてはシェイクスピアも全く臺なしにされる云云』という終結的判斷をその完全なる強度をもつて認めたのです。とまれあの作は鑄直され、鏝滓を拂い、新しき一層の金屬をもつて移し變え改鑄されねばなりません。かくして大兄の前に再度の見參を致させましょう。一切がただ思考の産物にすぎません。それでひどく腹が立ちます。……」ヘルデルの批評は依然として明らかではないが、ここではゲーテは少くとも彼の批判をみとめてゐるのである。

ここにも述べられているように、ゲーテは改作を志していた。しかしヘルデルの批評を受取つたのはウェツラルにいたときのことであり、このときはいうまでもなく「ウェルテル」の母胎となつたロッテへの愛の灼熱の時期であつたから、とうてい改作に着手するだけの餘裕がもてなかつた。實際に改作にとりかかつたのは翌一七七三年のことである。では、それはどのように行われたであろうか。再び「詩と眞實」によれば、「私はそれ（筆者註、ヘルデルの冷評）に迷わされず、自分の對象を鋭く睨んだ。さいはすでに投ぜられていた。問題はただ、駒をいかに有利に盤上に並べるかということだけであつた。この點でも自分に助言してくれる人は誰もいないだろうということはよくわかつてい

た。やや時を経て自分の作品を他人のもののように眺めることができるようになったとき、たしかに私は、時と所の統一を放棄する試みによつて、そのためにこそますます必要となるより、高い統一をもこわしてしまつてゐることをさとつたのである。私はべつに腹案も構想も立てないでひたすら想像力と内的衝動とに従つたのだから、はじめのうちは主題から逸脱するというおそれは殆どなかつた。事實、最初の數幕はまあそんなところだと言つていい出来ばえであつた。ところがあとの方の幕、ことに終りの方では、知らぬまに私は不思議な激情に壓倒されていたのであつた。私はアーデルハイトを愛すべき女人として描こうと心がけてゐるうちに、みずから彼女に惚れこんでしまつて、知らず知らずに筆はもつぱら彼女に向けられ、その運命に對する關心が壓倒的となつていつた。それでなくても終りごろにはゲッツは花々しい活躍を停止し、それからただ農民戰爭に参加して不幸な運命を迎えるために歸つてくるのにすぎないのであつてみれば、藝術上の桎梏を一擲して新しい領域に自分の力をためしてみようと考へていた作者の胸の中で、魅惑的な一女性がゲッツを押しつけてしまつたことほど自然なことはなかつた。こうした缺點あるいはむしろこうした非難すべき過剰に私はたちまち氣がついた。私の文學の本性はたえず私を統一へと驅り立ててやまなかつたからだ。それで私は、ゲッツの自叙傳やドイツの古文書ではなくて自分自身の作品を念頭におき、それにますます多く歴史的なまた國民的な内容を興えることに努めるとともに、これに附隨する假構的なあるいは單に激情的な點を拭い去ろうと心がけた。その際もちろん私はいろんなものを犠牲にした。人間としての好尚は、藝術上の確信に道を譲らざるを得なかつたからである。たとえば私は怖ろしい夜のジプシーの場にアーデルハイトを登場させて、美しい彼女の出現に奇蹟を行わせては、してやつたりとうぬぼれていたのであつた。が、さらにくわしく吟味を加えた結果、

彼女は追いはられた。同様に第四幕および第五幕でながながと細絛されているフランツとその女主人との情事も切詰められて、ただその主要な點でだけ光をあらわすことを許された。だから私は現に今なお原形のまま私が所蔵しているこの初稿にはなんら變更を加えないで、全體を書き改めようと決心した。そしてこの仕事も精を出してやつたので、二三週間後にはまつたく面目を新たにした一篇ができあがつた。」大分長くなつたけれども、改作のいきさつを作者自身の口から興味深く物語っているので、あえて引用したのである。

ここにも書かれているように、「ゴットフリート」が「ゲッツ」となるまでには相當に思い切つた鉦が振られている。構成からいうと、五幕に變りはないが場の數は全體で四つ減り、總數五十五となつている。すなわち第三幕で一つ、第四幕で一つ、第五幕で二つ削られたことになるが、これはただ單に「ゴットフリート」にあつた場面がそつくり削られたというような性質のものではなく、全體の統一という觀點からかなりの改訂が行われているのである。ことに第五幕は徹底的に手を加えられ、すつかり面目を新たにしている。もちろん第四幕までも、場の數の變つていない幕でさえ、内容的にいつて多少の差こそあれ異同のあることは附け加えておかなくてはならない。さてその第五幕であるが、「ゴットフリート」では十六場あり、そのうちアーデルハイトの活躍する場面が第一、第三、第六、第九、第十一、第十五と六つもあり、更に第十二と第十三では彼女は直接登場はしないが重要な役割を果している。これに反して「ゲッツ」では、彼女が直接にすがたを現わすのはわずかに第八場のみで、多少とも關聯のあるのが第十と第十一とである。このことを見ただけでほぼ「ゴットフリート」と「ゲッツ」のちがいの主要な點を察することができるであろう。この第五幕が全篇を通じて最も改變の手を加えられたものなのであつて、これにくらべれば他の幕における

それは殆ど言うに足りないほどのものである。アーデルハイトはゲーテの創造した女性であり、「ゴットフリート」を書いていこうちに彼女の魅力はワイスリンゲン、フランツ、ジプシーの息子、ジッキンゲン、祕密裁判所の刑吏を次々に捕えたばかりか、ついには作者自身をも呪縛してしまつた。これではゴットフリートの物語なのかアーデルハイトの物語なのか分らない。ヘルデルがシェイクスピアを引合いに出して非難しているのも、ある點ではこのことを衝いているものと思われる。アーデルハイトの原型は、「アントニオとクレオパトラ」の女主人公に求められると考えられるからである。冷靜に考えたあとのゲーテは、このように餘りにもさばりすぎたアーデルハイトを少し後景に退かせた。彼女とジプシーたちの場面は削りとられ、その代りジプシーは傷ついたゲッツを助けるものとして登場することになつた。やや不自然なアーデルハイトとジッキンゲンとの情事は全く姿を消し、その代り間接的に皇儲カールとの関係が示される。刑吏が危うく彼女にしてやられる場面も除かれた。フランツとの情事もその現場が削られたばかりか、彼の毒殺は自責からの自殺に變えられた。こういう多くの削除をあえてしてその代りにゲッツの場面を増したため、アーデルハイトは脇役に退いてゴットフリートの物語が本來の主權を恢復し、筋の統一はとれたが、「ゴットフリート」におけるあの不羈奔放な妖婦アーデルハイトの潑刺たる魅力は當然滅殺されることとなつた。しかしそれはこの戯曲の性質上やむを得ぬことであり、もしも彼女の魅力をもとのままに生かしておこうとするならば、アーデルハイト劇はゲッツ劇からは獨立しなければなるまい。

「ゴットフリート」から「ゲッツ」に至つてやや戯曲としての體裁をととのえたといえ、在來の戯曲的常識からいうならば、依然として「ゲッツ」は一つの怪物たるの存在を失わなかつた。當時の文壇劇壇を壟斷していたゴットシェト一派の金科玉條と仰いだ三統一の法則はこつばみじん粉砕されたのである。舞臺はウインズドルフ、ヤクストハウゼン、バンベルク、シュワルツェンベルク、シュペッサルト、アウグスブルク、ハイルブロン等を轉々と轉げまわり、しかも時としてはわずか數行の會話でたちまち遠隔の地へ一氣にすつとぶ。場所の統一どころではない。この點では師シェイクスピアをはるかにしのぐ奔放さである。時に關しては、ゲッツの自傳の劇化であるだけに相當な時間の経過をとまなつてゐるし、「ゲッツ」になつてからゲッツは主人公の地位に即きはしたが、まだ「ゴットフリート」においては、一體アーデルハイトとどちらが主人公なのかと思わせるほどアーデルハイト劇の重心が不當に重くされている。また當時の劇に用いられたお上品な言葉と打つて變つて、「ゲッツ」には野卑で民衆的な、しかしそれだけに生命に充ちた表現がしばしば見出される。たとえば第三幕で一人の兵士は、ここで何をしているんだと聞かれて「暇をもらつて急の用足しをしているんだ。昨夜の馬鹿げた勢揃いからこつち腹工合をわるくして、年中馬から下りなければならん」という箇所があり、「ゴットフリート」の方は全體的に言つてもつとこつち腹工合が多く且つもつと俗であるが、そのうち一つの例をあげてみよう。第一幕でゴットフリートの妻エリーザベトはマリアに向つて言う。「柔弱なばかりに善行をする人間は、小便をこらえられない人よりましだといえませんよ」。これが女性の言葉なのだから今日のわれわれでも多少驚かざるを得ない。ましてやフランス風の優雅な劇ばかり見馴れてきた人たちにはどのようなにひびいたか、大よそ察することができるであらう。こうした破天荒な試みはすべてシェイクスピアから來

ているが、ゲーテの方がもつと甚だしい。前掲ザルツマン宛ての書簡にはゲーテは、「ゴットフリート」の企てのためにはホメルもシェイクスピアも忘れられたと書いているが、創作の過程ではそうであつたらうけれども、心の底にシェイクスピアのあつたことは否定できない。シュトラースブルク時代以後のシェイクスピア崇拜は非常なものであつて、現に「ゴットフリート」執筆の二ヶ月ほど前に當る十月十四日には、「シェイクスピア祭のために」と題して彼に熱烈な讃仰の辭を捧げているのである。そしてこういうシェイクスピア崇拜の淵源を知るためには、當時のドイツ文學の情勢に一瞥を注いでみなければならぬ。破天荒な「ゴットフリート」といへども、やはりそれを生み出す地盤があつたのであり、「ゲッツ」はいわば新時代の口火を切つたものだからである。

## 六

ドイツの文學界は十八世紀の中ごろまでは全く啓蒙思想の支配下にあり、ドイツの國際的な地位に比例して萎靡沈滞をきわめていた。ところが、北ドイツのブランデンブルクに有力な國家としてプロイセンが擡頭しはじめるのと殆ど期を同じくして、文學の方にも新たな胎動の氣配が見えはじめた。すなわち、クロプシュトック、レッシング、ウーランツの三大詩人及び神秘家ハーマン、批評家ヘルデルらの出現である。クロプシュトックは敘事詩「メシヤス」によつて一世の耳目を聳動し、レッシングは「ハンブルク戯曲論」によつてゴットシェトラと戦う一方、すぐれた戯曲を次々と發表して地歩をかため、ウーランツは優雅な物語によつて若い人たちの心を魅惑した。こうして彼らは沈滞したドイツ文學に新しい氣息を吹きこんだのであつたが、彼らの活動はなお啓蒙主義のあとを曳いており、その

最後の一线を乗りこえるまでには至らなかつた。ところがハイマンの神秘主義（啓蒙思想の支配のもとにあつてもなお底流として存在をつづけていた）を承けたヘルデルに至つて、啓蒙主義に對する決然たる戦いが開始された。啓蒙主義の悟性萬能を排し、自然な感情の發現を唱導して天才を讃えるヘルデルの主張は、青年たちのあいだに多くの共鳴者を見出した。ゴットシェトによつて規矩とされ模範と仰がれたラシーヌ、コルネイユらに代つて、ホメール、シエイクスピアが尊敬すべき師となつた。ただヘルデルは作家ではなくてあくまでも批評家であつたから、彼の理論を實地に裏づけ得るだけの作品を缺くうらみがあつた。これでは文學運動として正常な發展をとげることはできない。かゝる缺陷を充足するものとして、ゲーテが「ゲッツ」をひつさげて颯爽と登場したのである。しかしそのゲーテといえども、シュトラースブルクでヘルデルと邂逅し、その教えを親しくうけて啓發されるまではやはり啓蒙主義文學の埒内にとどまつていた。「ゲッツ」以前の諸作、「戀人の氣まぐれ」や、「同罪者」や、あまたの詩はこのことをはつきりと物語つてゐる。ゲーテの天才はヘルデルによつて觸發されたのであつて、この點、二人の邂逅は大きな文學史的事件であつたといつても過言ではない。こうしてついに啓蒙文學に代つて主觀と感情の文學、シュトウラム・ウント・ドラングが主導權を握るに至るが、その最初ののろしとして「ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン」の持つ意義は極めて高く評價されなければならない。

したがつて、「ゲッツ」はまず啓蒙文學の破砕という面から見られなくてはならない。さきにちよつと觸れたシェイクスピアのなもの、すなわち三統一の意識的無視、用語の卑俗、自然な感情の發現などはことごとく啓蒙文學への叛逆であるが、そのほかにも、ゲッツの息子カールにおいて啓蒙主義の教科書的知識が非難されており、王侯や高級僧

侶たちのフランス宮廷風の優雅な、また亂脈で懦弱な生活様式が痛烈に攻撃されている。攻撃は單に啓蒙文學にのみ向けられたのではなく、生活を支配する啓蒙文化にも向けられたのである。ゲーテは彼の青年時代になお強く時流を支配していた啓蒙文化、フランスのみを高しとしてドイツ的なものをさげすむ傾向に激しい憤りを感じていた。彼としてライプチヒ時代あたりにはむしろ啓蒙文化の影響のなかにあつたわけであるが、フランス領であるシュトラースブルクでかえつてフランス的なものに背をむけ、ゴシックの大伽藍を讚美するに至つたのであつた。こうした氣持が、誠實でドイツ的な騎士ゲッツのアンティテーゼとしてバンベルクの僧正やアーデルハイト、ワイスリングゲンらを配置させることとなつたのである。だから彼の憤懣は十八世紀後半の支配者たちに向けられているのである。

## 七

しかしゲーテによつて讚美された豪快な騎士、誠實なるが故に裏切られ、絶望しながら獄中に死ぬゲッツ・フォン・ベルリヒンゲンとは、そもそもいかなる人物であつたろうか。果してゲーテの描いたように、皇帝に對する忠誠の念は片時も失わないにもかかわらず、正義を重んずる氣持から闘つたり、やむなく農民軍の首領におされ、彼らの暴虐を制しようとする試みも空しくついに身の破滅を招く、悲劇の英雄であつたろうか。「ゲッツ」の註解を書いたアルベルト・チップェルや「ゲーテ」の著者ウイトコップのように、ゲッツの生涯をゲーテの「ゲッツ」と同じような態度で書いている人もある。だがしかし、あえてエンゲルス（ドイツ農民戦争）やメーリング（ドイツ史）を引用せずとも、「ゲーテの生涯」の著者ウイトコウスキーは、「騎士階級は實際は零落した階級であり、没落するだけのねうちが

あつた。ニュルンベルクの市民はゲーテが描いたほどに卑小ではなかつた。ゲッツは詩人の與えたような高い志操を持つてはいなかつた。劔はことの如何を問わず、利益になると思われるところではどこでも戦う用意をしていた。帝國軍と高等法院は十八世紀になつてはじめてあのように笑うべきあわれなカリカチュアに墮したのである」と述べているし、もつと手近にはマイエルの百科辭典が、「史上のゲッツは詩人によつて描かれたドイツの誠實な人間の理想像ではなく、物質的に窮乏し零落して、争鬪と追剥とが自己目的となつていた下級貴族の一典型である」と書いている。

この下級貴族とは、當時のドイツにあつてはなんら積極的な意味を持ち得ない騎士階級の人々であつた。貴族のうち上級貴族から諸侯が生じ、中級貴族の一部は諸侯に成り上り、他の一部は下級貴族に轉落した。皇帝は權力を失墜して諸侯の位置におちた。絶對王政が成立した他の國々にくらべると大變なちがいである。これは主として經濟的な理由からきている。ドイツとても産業の發展はしだいに顯著なものとなりつつあり、農村的な地方産業に代つて都市のツンフト的工業經營がおこつて都市は繁榮に向つていたが、他のヨーロッパ諸國にくらべればすべての點でまだまだ立ちおくれの情勢にあつた。産業の中心は諸地方に分散した都市に集中して、そのおのおのを結合すべき全國的な利害がなかつた。したがつて強力な中央集權の必要も存せず、各地方がそれぞれに小さなブロックを形造つていくにすぎなかつた。こうしてドイツは三百六十から四百もの小邦に分裂し、それを統べるものとして皇帝が上にあつたには相違ないが、こうした情勢のもとはとうてい絶對權を握ることができず、名のみ高くして實は諸侯なみの勢力しか持ち得なかつたのであつた。下級貴族すなわち騎士階級の一部分は、こういう皇帝に直屬する帝國直轄の騎士であつた。ほかならぬゲッツもその一員であるが、かつては武器をとつて重要な役割を果し得た彼らも、このときはすで

にそのレゾン・デートルの大半を喪失してしまつていた。銃火器の發達、集團的な歩兵による戰術への轉換は、個人個人の戰闘を得意とした彼ら騎士たちの存在意義を減殺せずにはおかなかつた。この點彼らは明治維新におけるわが國の武士たちを想起せしめる。民兵の力を輕視しておのれの腕に自信を抱き、それが根柢からくずされると昔のよい時代の再來をこい願つた武士たちのように、ドイツの騎士たちも新しい時代に不滿を抱き、何とかしてかつての勢威を恢復せんものと絶望的な戦いをはじめに至つた。かくして一五二二年、フランツ・フォン・ジッキンゲン、ウルリヒ・フォン・フッテンを指導者とする騎士階級の一揆が起つたのである。しかし彼らは騎士以外に味方を得ることできなかった。なぜならば、彼らの目標は諸侯および諸侯なみの勢力を有する高級僧侶たちから權力を剝奪して帝國の勢威をつよめ、一種の貴族的民主制を布くことにあつたから、當面諸侯を敵とするという點でのみは都市の市民や農民たちと利害をひとしくしていたわけであるが、その後に行わねべき貴族民主制は當然市民と農民との犠牲の上に立たなければならぬものだつたからである。しかも當時のドイツにはすでに強力な都市が存在していて、今更彼等の志向する政治制度にもどることは不可能でもあり、またもどつたにしたらその性格たるや、それにくらべれば現存した政治および經濟の形態ですらなおかつ進歩的なものと稱し得るほどのものだつた。それに、窮乏した騎士たちは都市の掠奪や身代金の請求などによつて糊口をしのいでいたのであつてみれば、彼らが市民を味方につけることができなかつたのはなおさら明白である。かくて騎士たちは單獨で諸侯に當らざるを得ぬこととなり、當然みじめな敗北を喫してジッキンゲンもフッテンもともに敗死する運命をまぬかれることができなかつた。

同じ騎士階級に屬するゲッツもやはり没落の悲劇的宿命をになつてゐる。しかし彼はジッキンゲンのように敗死し

たり、ゲーテの「ゲッツ」のように自由を求めつつ牢獄に死んだりはしなかつた。彼の生涯は殆ど戦いの連続といつてもいいが、晩年は比較的安穩な生活を送り、八十二歳の高齢で大往生を遂げているのである。しかも、誠實なるが故に裏切られるというような騎士ではなく、他の騎士同様斬取り強盗も働けば、金持ちを捕えて莫大な身代金を拂わせもするし、逆に農民軍を裏切つてさえいる。すなわち一五二五年勃發した農民戦争にはむりやり首領に祭りあげられているが、その前に、先ずプファルツ選舉侯について農民にそしてまた選舉侯に味方するという二重の裏切りをやつてのけただけあつて、形勢不利と見るやまたも農民を裏切つたのである。だからゲーテの「ゲッツ」と史上のゲッツとはまるでちがう人間なのである。といつて、そのことでゲーテにけちをつけることはもちろんできない。詩は眞實ではないからである。ゲーテにとつて最も問題だつたのは、執筆當時のドイツの秩序に對する不満と反抗とであつた。個人が思うままの力を發揮して自由に権力者に反抗することができる時代へのあこがれ、裏返せば、市民階級の無力さと封建的桎梏の強さとの故に何一つ思うことのできない現状への不満が、たまたま騎士ゲッツの姿をかりて爆發したまでである。史上のゲッツがどんな人物だつたかといふことは大した問題ではない。不満を託するに足る人物が見つかればよかつたのである。こうしてゲッツの卑小な面はすべて削られ、反抗の客體たる憎むべきものはゲッツのアンティテーゼたる僧正の圏内に押しこめられた。これによつて史實には大變改が加えられたわけであるが、ゲッツら騎士階級の歴史的意義は歪曲されなかつた。ゲッツは詩人によつてあのように英雄化されたが、ゲッツら結局新しい時代（それがゲッツにとつていかに厭わしいものであつたにせよ）に押されて滅びてゆくしかない騎士階級の一人にすぎなかつたことを、われわれは「ゲッツ」のなかにはつきりと讀みとることができよう。表面上の史實は變え

## 一橋論叢 第二十五卷 第一號

ていながら、詩人ゲーテの鋭い感覺は歴史の流れを正しく把握していたわけである。

附記。翻譯は木村謹治、齋藤榮治、高橋義孝諸氏のものを使用させて頂いたが、統一上假名づかいや字句を多少改めたところがあることをお断りしておきたい。